福岡大学医学会ニュース

第34号

福岡大学医学会
福岡市城南区七隈
福岡大学医学部内
印刷　福岡印刷株式会社
福岡市博多区東那珂一丁目10-15

福岡大学筑紫病院の現状

福岡大学筑紫病院長　松崎昭夫

〝院長の抱負を〟とのことであるが今期就任して既に半分の一年が経過しており、又院長には抱負を述べるほどの権限もない。

今まで何度も書いてきたように筑紫病院は抱負を述べる状態にはない。繰り返しになるが、多くの方々にとって興味のない事であり、殆ど御存じないことと思われるので本院の現状と小生が院長に就任してから今までの経過を述べて後、取り急ぎしなければならないことを述べる。

本院開設当初は外来患者一五〇名が目標であった。目標に向かい全職員が非常な努力をしてくれ、患者は増え、そのうち二〇〇名になった。平均二〇〇名と云っても年末には四〇〇名をこす患者が殺到する。そのために一五〇名程度を見て作られていた病院では外来の狭さが問題になるようになった。拡張するにも泌尿器科、耳鼻科、眼科増設のためにスペースは皆使われており拡張の余地は無くなっていた。待合い室の沢山の患者を前にして病棟にいる医師に動員をかけるにも診察するスペースが無いのである。之は診察室だけの問題でなく、患者の待合い室のスペースも含めた問題である。それでも患者は増え続け、現在は平均四〇〇名を越え、年末には八〇〇近くなる。待合い室の椅子は少ししかない。事務の人が状況をみて空いたあらゆる所に折りたたみ椅子を持ち出して置いても座る場所はなく、立って待たざるを得ない人が沢山居ることがおわかり頂けるであろうか。このような状況は患者にもわかり患者の伸び率は減り、むしろ減ることさえ考えられる。周辺の人は例えば徳洲会のようなきれいな大きな所に逃げていく。患者に如何に快適なスペースを提供するかという事が常識の世の中で、病院で患者が立って待たねばならないなど一般には考えられないことである。しかし、筑紫病院では現実である。更に考えて頂きたい。病院では沢山の検査がなされる。中でも尿や便の検査は内科系の場合必須である。しかし、当院検査室のそばには天神の公衆便所並のプライバシーも保てない前近代的な便所が二個しかない。二カ所ではない二個である。ここではこれで毎日限られた時間に多くの患者さんに検体をとってもらわねばならないことを考えていただきたい。待っている間には便意を催す人も多い。便所はその他に廊下から完全に遮断されていない、汚い、暗いのが二カ所しかない。これも作ればどうかとお考えと思うが作る場所が無いのである。

病棟はどうか？　本院は三四五床の許可病床を持っている。しかし二六〇床の利用がやっとである。なぜかと言えば病室の作りが悪いためで、不経済な使用しかできない。又個室がない。幾つか有るにはあるが粗末すぎるため〝入院は他の病院で〟と言う人がかなりある。世の中はホテル並の部屋で如何に快適な入院生活をさせるかと競っているときにである。〝うちには入れられません〟と主治医から云われる管理者のつらさを考えていただきたい。便所、洗面所、風呂についても同様である。このような悪い条件に拘わらず多くの患者さんに来ていただいているし、悪い評判もあまり聞かないのは職員諸氏が努力してくれている結果である。一番患者さんに接する看護婦諸氏の努力には特に感謝している。時には遠くから入院し、〝部屋は悪かったが自分に接した主治医、看護婦の態度、説明が如何によかったかを退院後自分の事業所の従業員に話し、これからうちでもこのようにしようでないかと云った〟等との御手紙を頂くこともある。

診療部門以外も沢山の問題がある。検査室は狭いスペースで改善要求を出してもそのままである。これはしようと思っても出来ないのでしかたない。カルテ、レントゲンの保存場所もなくなった。レントゲンフイルムは一番の資料であるがしかたない、法定期限が過ぎたものは廃棄している状態である。そのため学会発表をするために探したら貴重なフイルムがなかったという悲劇も発生している。どうして？と考えられるかもしれない。膨大な量のフイルムをチェックするのにカルテと照合できない。これは物理的に不可能である。又その場所もない。選別全てをよく分かった人がすることが出来ない。そのために所見のあるフイルムも捨てられることがおきるわけである。このような膨大な時間を要する仕事はみな勤務時間外の強制である。超過勤務手当は出ていないのである。それでも場所が無く、消防署の注意は寛悟で廊下に置くようになった。どこか貸倉庫にとの話もあったがそれでは診療の役に立たない。必要なときに直ぐに出てこそ役に立つものである。倉庫くらい屋上に作ったらとの声も挙がったが、建物が悪く許可にならない。外には建てる余地がない。

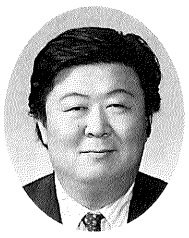
外では駐車場がない。今の世の中病院は駐車場が無くては話にならない。しかし当院はスペースがない。道を隔てて借地があるがこれも狭く自動車の往来が激しい。交通信号もない道を横切らなければならない。患者にとって危険であること限りない。それも狭すぎて〝駐車の場所が無くてあちこち探し回らねばならなかった〟と患者が診察室に文句を云いに来るのが現状である。

このため以前将来計画フォーラムが計画されたとき当院としては将来の病院建設用地の購入のみを挙げた。それなくしては将来計画が立たないことがはっきりしていたからである。現在地は大変立地条件のよいところであり、これは後に売却する事が可能であると考えた。このため五年前に院長に就任時最初に学長に云ったことはこの問題であった。それに対する回答は〝十分理解しており、土地購入の予定もある〟ようなことで地図を示した説明も受けた。その後のことは既に書いたのでここに書かない。執行部が変わったが問題の解決にはならなかった。結果は上記の通りで大学の将来展望は全くないのではと疑わざるを得ないでいる。権限のない院長としては出来る事は限られている。自分らのことは棚挙げして将来のために努力したがこれは大学の方針で無駄に終わった。

それなら現状打開を如何にするかに取り組まざるを得ない。根本的な事が出来ないとなればつぎはぎだらけでも何かを少しでも改善するよりしかたない。しかし権限のない院長の努力だけではどうにもならない。大学も巨大化しており、自分の所に関係することには異常な興味を示されるがそれ以外には大して興味もなくそんなところの改善など頭のはしにも入らない人が多いであろう。このような状態の下でどうするかである。問題は前に挙げたとおりで山積しているが、我々としては患者を第一にすることから始めたい。そうすると第一は外来の問題の改善となる。外来に来てくれる患者さん方に環境条件は悪くとも他所並みには診れる診察のスペースを確保し、検査をはじめとした便所の確保も考える。同時に資料保存のスペース確保も必要であろう。これを現在地で如何に解決するかと言うことになるが、同時に駐車場確保の問題も絡み、先に挙げたようにその殆どは大学執行部の意志にかかっていることになる。院長は目標達成のために職員の意志を纏め邁進することしかできない。残る一年更に努力だけは続けるつもりである。

福岡大学医学部同窓会七隈支部設立

眼科学助教授　林英之



平成八年八月をもって福岡大学医学部同窓会七隈支部が発足のはこびとなりました。つきましては七隈支部設立に至る経緯ならびに七隈支部としての活動の現況ならびに今後の予定について本紙面をお借りして述べさせていただきます。

福岡大学医学部同窓会は昭和五十三年（一九七八年）に当大学が六三名の第一回卒業生を送りだした前後から、医学部同窓会の設立が討議され発足したものであり、福岡大学全体の同窓会の学部別下部組織のひとつとして活動し、以後年毎に会員数を増し現在に至っています。初代会長は山崎節氏（一回生、現在福岡市内で開業）であり、現在は高木忠博氏（一回生、現在福岡市内で開業）が二代目会長としてその任にあたっています。

同窓会の発足当初は卒業生の大半が福岡大学病院に研修医として採用され勤務していたため、特に同窓会に各支部組織を置く必要はありませんでした。他の学部であれば卒業生の大多数は就職のため全国各地に広がっていくため、各地域ごとの支部が比較的早い時期から設立されているのと較べますと、医学部では最近に至るまで医学部同窓会はすなわち福岡大学医学部、病院勤務者を対象とする時代が長く続いてきました。

しかし、卒業生も十回を数える頃から徐々に各地に就職、あるいは開業する同窓生の数が増加し、また卒業後に他大学や研修施設に勤務する同窓生の数も同様に増加してまいりました。それに伴い各地域に医学部同窓会の支部が下部組織として次々に発足するに至りました。その最大の支部は福岡支部であり、会員数約三〇〇名を数えるに至っております。福岡大学、福岡大学医学部、福岡大学病院に勤務する同窓生は、この福岡支部あるいはそれからさらに分離した七隈支部の一員として同窓会に加わってまいりました。しかし同窓会組織の変革がすすむなかで福岡大学に勤務する同窓生も独立した支部を設立することが必要とされるようになってきました。その理由としてはまず第一に福岡大学、医学部、病院に所属、勤務する同窓生数が二〇〇～三〇〇名にのぼり、他に六〇〇名を越す学生会員、各講座の主任教授の特別会員および他大学出身で福岡大学医学部同窓会に所属を希望された準会員などを多数含むからであり、次にその構成員が医師としての教育を受けつつあるものと教育を行うものであり、他の地区支部にみられるように、既に医師として完成され実務に励んでいる人々とは性格が異なる点があげられます。

そこで同窓会高木会長の依頼により七隈支部設立のため、平成七年暮れに七隈地区選出評議員、ならびに各学年選出評議員のうち福岡大学、医学部、病院に勤務する諸氏からなる七隈支部設立準備委員会が発足し、数回の会合を経て七隈支部設立趣意書原案および規約原案が作成されました。

さらに平成八年三月に七隈支部設立総会が七隈支部所属予定会員の大多数の委任を受けて開催され、総会に対する支部設立願いならびに規約原案が可決されました。この規約原案、ならびに設立願いは医学部同窓会理事会ならびに同七月に開催された同窓会総会において賛成多数で可決され、ここに七隈支部の設立をみることになりました。著者は三月設立総会において理事会によって承認された暫定支部組織の初代支部長に選任されるに至りましたが、支部の会則の定めるところにより平成八年八月をもって任期終了、改選されるに至っております。八月には新会長の選出ならびに新役員の選任が行われる予定でしたが、設立のための事務処理に忙殺され改選の準備が遅れるに至ったため同窓会長の許可を得て任期を十二月まで延長し十二月に改めて新支部長の選任を行う運びとなりました。従って新支部長の任期は平成八年十二月から平成一〇年七月末日までとなります。任期を終えるにあたり関係各位の御助力、御高配に紙面をおかりしてお礼申し上げます。第二代支部長は江浦陽一氏（一回生、福岡大学医学部耳鼻咽喉科勤務）です。

当七隈支部は医学部同窓会の中でも極めて特異な位置を占めます。母校と言う言葉はラテン語からの直訳ということですが、七隈支部は医師として立つ各支部会員のゆりかごであった場所であり、また現在ではその弟や妹たちの眠る場所でもありつづけています。そして当支部会員のなかにはそのゆりかごを揺らし日陰や雨風を遮る手の一部となることを願って働く人々がふくまれています。七隈支部の重要な目的は会員相互の親睦よりもむしろそれら様々な人々の意見をくみあげて母校に何らかの寄与を試みることにあるというべきでしょう。その小さな一歩として医学部六年生に対する七隈支部会員による補習講義を企画し医学部長の賛同、ご協力の下に実施することができました。今後とも学生会員、正会員、医学部当局のご意見ご要望を募り、また各支部からの要請に基づいて福岡大学医学部ならびに病院の発展に寄与したいと思いかつ各支部への助力となることを願う次第です。

最後に各支部にはそれぞれ何らかの親しみやすい愛称をつけることをすすめられておりますが、七隈支部にいまだ愛称がございません。なにか良い愛称がございましたら同窓会支部までご一報下さるよう紙面を借りてお願いいたします。

福岡大学医学会 総会・例会の報告

日時　平成八年七月二十四日（水）
　　午後五時～午後七時
場所　福岡大学医学部臨床大講堂

第19回　総会

議事
1、報告事項
2、役員改選
3、平成七年度会計報告ならびに平成八年度予算（案）

第35回　例会

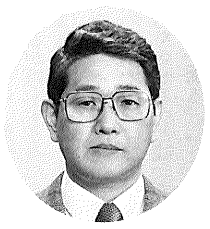
講演
1、座長　荒川規矩男　教授
「ピトキマーゼ　―基礎から臨床まで―」
内科学第二　浦田　秀則　助手
2、座長　朝長　正道　教授
「悪性神経膠腫浸潤能とタンパク分解酵素」
脳神経外科学　山本　正昭　講師
3、座長　内藤　説也　教授
「自己免疫疾患と IL-A」
腎センター　兼岡　秀俊　助教授
4、座長　檀　健二郎　教授
「皮膚消毒薬の効果の違い」
麻酔科学　櫻木　忠和　助教授

自己紹介

平成八年五月以降に昇格又は就任

病理学第二教授
坂田　則行

昭和四十八年に群馬大学を卒業し、大学院で病理学を専攻し学位を取得しました。修了後は内科に行く予定でしたが適当なポジションがなく、とりあえず中検病理の非常勤医員として臨床病理とそれまでの研究を継続することになったのが、病理の道を一生やることになってしまったきっかけです。昭和六十二年に本学に助教授としてお世話になるまでは群馬大学の第二病理学教室でレオロジーの立場から血管病理を研究していました。本学に赴任してからは血管壁細胞とマトリックスとの相互作用が動脈病変ことに粥状硬化の発症や進展にどのように関係しているかという点から研究を進めています。この間、平成三年四月から一年間 INSERM と日本学術振興会との交換派遣研究員としてパリ大学、ロベール教授のもとで勉強させていただきました。最近は、糖尿病との関係で問題になっている生体蛋白とグルコースとの間の非酵素的糖化反応が糖尿病性血管合併症を引き起こす機序について興味を持っています。これからもオリジナリティのある質の高い仕事を目指して、教室の若い先生方と一緒に研究を進めていきたいと思っております。また研究だけでなく、教育と病理診断業務にも積極的に取り組んでいきたいと思っておりますので、今後ともご指導よろしくお願い申し上げます。



泌尿器科学教授
大島　一寛

医学部改革の嵐が吹き荒れていた昭和四十一年九州大学を卒業しましたが、入学時の安保騒動に始まってインターン制度反対・国試ボイコットで終わった騒々しい七年間でした。しかし、これらの問題に直面することで医学生としての自覚も培われ、夏休みには僻地の検診、四国の国立療養所での講習、余暇を惜しんではテニス・登山・旅行と青春も謳歌して素晴らしい学生生活を送ることができました。

泌尿器科入局後は広島日赤病院、県立宮崎病院を経て昭和四十六年七月から平滑筋の電気生理学では日本が世界に誇る九大歯学部栗山熙教授のもとで尿管平滑筋の研究に携わりました。折しも福大医学部設置が決まり、昭和四十六年九月暫定病院（九電病院）への出向を命じられましたが、案内された現病院予定地は雑木林を掘り返しただけの荒れ地で数日は不安で眠れなかったことを思い出します。

昭和六十一年ミシガン州アナーバーのミシガン大学に留学の機会を得ました。アルバイト医学生を相手に動物実験の傍ら、世界各地から訪れる著名な小児泌尿器科医に混じって多くの手術を経験することができ、また小児病院玄関のレリーフにあった「子供は神からの預かりもの」との言葉が今日の診療の支えになっています。

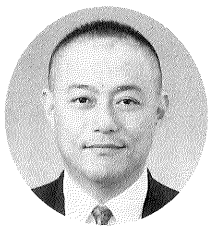
帰国後は小児泌尿器科に専念し、専門病院としての評価も徐々に上がってきましたが、日本では未だ小児泌尿器科への認識が高いとは言えません。平成八年十月から改めて再出発することになり一層の努力を誓っていますが、同門の皆様にも御力添えを宜しくお願い申し上げます。

形成外科助教授
大慈弥裕之

昭和五十五年に本学を卒業後、北里大学塩谷信幸教授の下で形成外科を学びました。昭和六十三年、母校に戻り病態機能系の大学院生として薬理学古川教授からご指導を受け、交感神経節の研究を行いました。帰福後まもなく、先輩や同級生を中心に臨床各科の先生方から声がかかるようになり、腫瘍切除後や外傷後の再建手術のお手伝いをするようになりました。平成二年に整形外科名誉教授の高岸先生からお誘いを受け、整形外科の助手になり、形成外科に興味を持つ仲間とともに形成外科診療班をつくり、臨床、研究、学会活動を開始しました。

平成八年四月一日より、福岡大学病院に診療科として形成外科が新設され、緒方教授が形成外科の診療部長を兼任していただくことになりました。現在、助手以上の形成外科専任スタッフは、私を含めて二人だけです。週に4日の外科診療、週に2日の定時入院手術、週に3日の外来手術、さらに熱傷や顔面外傷などの救命救急患者の手術、皮膚科、耳鼻科、脳外科など他の診療科からの依頼による再建手術、ならびに緊急手術に忙殺されています。

研究面では、皮弁移植（マイクロサージェリーによる組織移植）後の虚血、再灌流障害や No reflow phenomenon の成因、および感染（特に MRSA 感染）における創傷治癒を主なテーマとして、臨床ならびに基礎的研究を行っています。また、救命救急センターと共同で全身重症熱傷患者に対するスキンバンクの体制を整えつつあります。毎年、フレッシュな仲間が増えるのが楽しみです。今後とも、ご指導のほどよろしくお願い申しあげます。

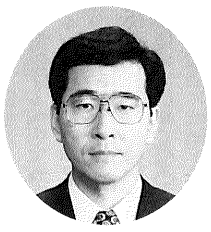


泌尿器科学助教授
辻　祐治

福岡大学医学部を昭和五十五年に卒業し、泌尿器科に入局しました。福岡大学病院で二年間の臨床研修をした後、泌尿器科の大学院に進み、坂本名誉教授のご指導で「虚血性急性腎不全」をテーマに学位を取得させていただきました。学位審査も終わり「これからどうなるのかな？」と考えていたところ、佐賀医科大学泌尿器科の眞崎教授からお声が掛かり、坂本名誉教授のお許しを得て、昭和六十一年から平成一年まで米国の Cleveland Clinic で「腎血管性高血圧症」の研究に従事しました。帰国後は泌尿器科に復帰させてもらいましたが、平成二年には泌尿器科が新設される筑紫病院に有吉教授とともに異動させていただきました。筑紫病院ではスタッフ三名からのスタートで、そのため有吉教授に泌尿器科手術をマンツーマンで教えていただくという願ってもない機会を得ることが出来ましたが、平成六年からは再び七隈に戻り、現在に至っています。

アメリカから帰国して一ヵ月で病棟医長を命ぜられましたが、大学院を出てすぐに留学したため臨床経験が不足しており、先輩や後輩の先生、看護婦さん、そしてなにより患者さんにさぞやご迷惑をお掛けしたことと思っています。その後もこの「臨床経験が足りない」という思いはずっと付いてまわっていますが、そのコンプレックスのお陰でなにかにつけて慎重になり、お調子者の私にはちょうど良かったのかもしれません。ところが最近では臨床に従事した期間の方が長くなったせいか、たまに「謙遜し過ぎると、真に受けるひとがいるから困ったもんだ」などと横着なことを考えるようになってしまい、初心を忘れないようにと反省しています。

専門は成人泌尿器疾患全般ですが、教室の伝統である泌尿器科領域の超音波診断、副腎・副甲状腺（上皮小体）の内分泌外科には特に興味をもっております。副腎腫瘍や副甲状腺機能亢進症の患者さんがいらっしゃいましたら、どうかご紹介いただきますよう紙面を借りてお願い申し上げます。



内科第二講師
浦田　秀則

平成八年十月より病院講師及び病棟主任を拝命しました。就任二週目に事故による、入院治療のため業務を中断し、多大なご迷惑をおかけし恐縮しております。これまで入院に至るような大病も経験することなく来ましたので、ショックでありました。不注意による自業自得の結果でした。術後の経過も良く、多少のリハビリ期間をおいて復帰しております。今回は周囲の方々には大変なご迷惑をお掛けしたものの、始めて入院患者として立場を変えて医療現場を見る機会があった事は、今後の臨床業務を考えると良い教訓となったと思います。

私は一九八〇年福岡大学を卒業後二年間の内科研修を経て、大学院へ進学し臨床研究（高血圧の運動療法）で学位を得ました。卒後直ちに米国クリーブランドへ留学し、六年後独国ベルリンへ移り、足掛け一〇年に及ぶ海外研究生活を経験させて頂き、平成七年十二月より福岡大学へ戻りました。このような長期に渡る留学は異例です。これはひとえに荒川教授を始めとする教室の先、後輩方のお陰です。この留学の間に、臨床及び基礎研究における主題の発見にいたり感謝しております。

私は留学以来十一年間、心血管病変における組織レニン・アンジオテンシン系を研究主題としてきました。約三〇年前に荒川らによって単離同定されたヒトのアンジオテンシンは血圧調節のみならず、多くの病態生理学的活性を有しその役割の全貌は今だに明らかになっていません。私はクリーブランド留学中に心臓移植の際に得られる不全心を用いてキマーゼというアンジオテンシンII産生セリン酵素を分離同定し、分子生物学的手法を用いてクローニングも行いました。この酵素はヒトの全身に分布し、量的にも既知のアンジオテンシン変換酵素よりもかなり多い事が解っています。詳細は省きますが最近の研究成果では心筋梗塞、動脈硬化など重要な心血管病変の病態とも密接に関与している事が明らかになりつつあり、今後の基礎臨床研究の進展が期待されます。しかし、留学中に垣間見た欧米の研究機構と日本におけるそれとの間には大きな人的物的差があり、このギャップを埋める作業も始める必要性があり容易ではない事だと実感しております。

上述した研究上の発展から教室の先、後輩方に無理をお願いして留学を続けたのみならず、帰国時には臨床科のスタッフとして席を頂き僭越なことと感謝しています。明らかに臨床経験に乏しく、他のスタッフの足を引っぱっている状態だと思います。もともと私は〝一所懸命〟のタイプでついつい留学も長くなってしまいましたが、今回は臨床業務も実際に習熟出来るよう、また自分の未熟さに謙虚な気持ちを忘れず〝一生懸命〟勤めたいと思います。種々の面でご迷惑をお掛けする様なこともあるかと思いますので今後とも宜しくお願い致します。

内科第二講師
熊谷浩一郎

昭和五十九年に福岡大学医学部を卒業し、同第二内科に入局しました。循環器を専門に心臓カテーテル検査、心臓ペースメーカ等の診療業務に携わり、平成三年臨床検査部助手を経て、平成五年十月第二内科に講師として採用されました。心房細動をテーマとし、主に臨床的研究を行い米国の循環器学会誌 Circulation 等に報告してきました。その後さらに心房細動のメカニズムを解明するために、平成六年三月米国オハイオ州ケースウェスタンリザーブ大学へ留学し従来の説と異なる新仮説を提唱しました。さらにこの説に基づいた心房細動に対するカテーテルアブレーション術の有効性を検討しました。これらの研究成果を米国心臓病学会と世界心電学会の両学会で発表し、Young Investigator Award を受賞しました。その後今年九月に帰国し、現在に至っています。今後はこの新治療法の臨床応用について研究を進めたいと思います。これからもよろしく御指導の程お願い致します。

教室紹介

福岡大学皮膚科学

当教室は現在、利谷昭治教授が主宰され、その他のスタッフとしては、古賀哲也助教授、助手として清水昭彦、渋江賢一、久保田由美子、野中由紀子、辻田淳の五名、医員一名、研修医二名、大学院生一名、研究生二名の計一三名で、臨床の教室としては比較的小じんまりとしておりますが、若い医局員が多いので、明るい雰囲気をもつ教室で、教育、研究、診療において皆フルに活躍しております。

教育面では、卒前は講義だけではわからなかった皮疹や皮膚疾患の特異性、多様性を体験させるために外来・病棟実習を中心に、卒後は皮膚科専門医の資格に必要な臨床研修を中心に患者に対して責任ある対応がとれる臨床皮膚科医の育成を目指しております。

研究活動としては、利谷教授の専門分野であるアレルギー性皮膚疾患や皮膚真菌症に対する免疫学的なアプローチとして、特にサイトカインレベルでの病態解析、原因アレルゲンの同定法、治療への応用などを進めており、その業績を国内外の学会や雑誌にも発表し、その評価が徐々に得られつつあり、この分野での研究で論文博士も輩出しました。

診療面では毎日の外来でアトピー性皮膚炎や薬疹などのアレルギー性皮膚疾患、脱毛症、乾癬、皮膚真菌症、ウイルス感染症、皮膚腫瘍などの治療を行い、また最近、悪性黒色腫や悪性リンパ腫などの悪性腫瘍の入院患者も増加しつつあります。

福岡大学出身の教室員も増えて来たので関連病院もまた徐々に増え、地域の医療機関や学内からの紹介患者も増えてきました。今後臨床活動にも一段と力を入れ、学内外の卒業生から信頼される福岡大学皮膚科を目指し、教室員一同頑張っていきたいと思っておりますので、職員や卒業生の皆様の御協力をよろしくお願い致します。

（文責　古賀哲也）

第二十三回 医学部慰霊祭

第二十三回福岡大学医学部解剖体慰霊祭は、御遺族ならびに御来賓の方々、本学教職員と学生約五百十名が参列し、平成八年十月十九日（土）午後二時から福岡斎場において厳粛に執り行われました。

今回祀られた霊位は、学生の医学教育の目的で、正常解剖のために献体された三十二柱、病院で死去されて病因究明のために病理解剖を御承諾頂いた九十柱、合わせて百二十二柱でした。

献灯献花の後、厳粛な雰囲気につつまれて慰霊祭は進行し、三好萬佐行医学部長は祭詞の中で、医学の発展のため欠くことのできない解剖にご献体頂いた霊位とそのご遺族、さらに、ご協力を頂いた各種関係機関に敬意と謝意を表されるとともに『御霊位に対しましては、日々花を供え、香を断つことなく、敬意と感謝の念を捧げているものではありますが、本日ここに一堂に会し、皆様方の崇高な御意志を今一度思い起こして、今後益々、勉学、研究に励み、人類の幸福と福祉に貢献できますよう努力することを誠意お誓い致します』と新たな誓いを披瀝されました。

海外便り

ミネアポリスより

稗田　洋子

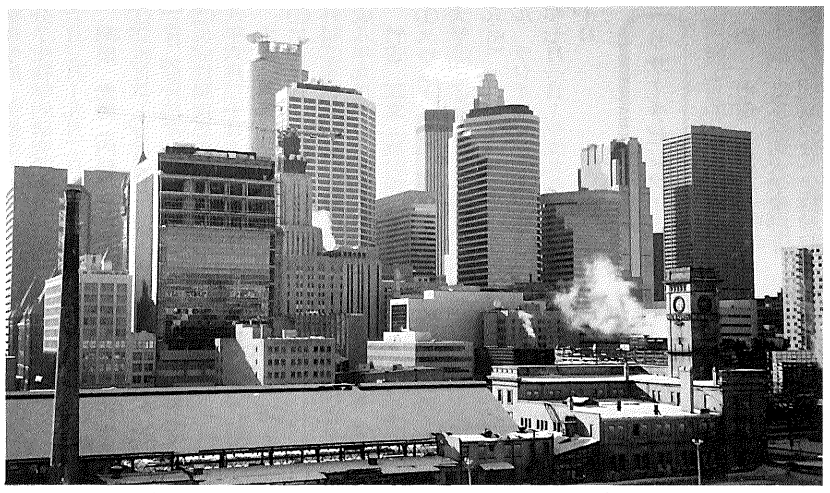
米国ミネソタ州ミネアポリスに移り住みまして早一年が経過しました。ミネソタ州はアメリカ合衆国北部の中心、カナダ国境に面した大陸の中央付近に位置しています。夏は快適、冬は極寒の気候です。特に昨冬は最低気温の記録を更新し、寒ーイ日（-30°C前後）が長く続きました。私は初めての冬でしたので比較する対象が無く、これがミネソタの冬なのだと納得していましたら、地元の人が口を揃えて最悪の冬だったと教えて下さいました。Minnesotaという州の名前はnative American の言葉「空色の水」という意味の"minisota"に由来していて、何千もの湖と川が点在するこの土地を彼等はミニソタと呼んでいたそうです。実際、一万二千以上の湖が確認されています。ツインシティーと呼ばれるセントポール（州都）とミネアポリス一帯には、ミネソタ州の四五〇万の総人口のうちの約半数の人が住んでいます。教育、文化、娯楽、スポーツ施設等、バランスよく充実した都市で、洗練された非常に美しい街です。

私が通っています Hennepin County Medical Center (HCMC) はミネアポリスのダウンタウンに位置し、病院と研究機関とを合わせ持つ巨大医学機関です。Toxicology ご専門の Dr. Pentel の研究室でポスドクとして昨年十一月からお世話になっています。この研究室では免疫反応を利用し、薬物依存や薬物大量摂取に対する治療法の開発が行われています。ボスを含め7人の小さな研究室で、ハイテクな機械を持ち合わせてもいないのですが、各自が現存のtoolを使ってプロフェッショナルなテクニックを持って研究を行っています。私は動物実験に関すること、および薬物動態に関することを任せられています。ラボではディスカッションが日常的によく行われ、お互いに誰がどういう問題を抱えているか、またどの段階にあるかよく把握され、非常にうまく回転していて、楽しく研究を行うことが出来ます。

たまたまラボでは私が唯一の外国人ですが、HCMCにはいろいろな国からたくさんの人が勉強に来ています。また近接しているミネソタ大学（マンモス大学）にも多くの留学生がいて、定期的にそういう人たちの為のパーティーがあり、私も時間がありますが、流暢に何カ国語も操る人、カタコトの英語で頑張っている人、バラエティーなルックスを始め、いつも、そこにいるだけで面白いのですが、違った文化に触れるということは非常に勉強になります。

アメリカという国そのものが本当に人種のルツボで、それなりに問題もありますが、日常生活から学ぶことが非常に多く、同時に日本という国を改めて学んでいる今日この頃です。

最後に私の今回の米国滞在を支えて下さっています柏村教授および法医学教室の皆様、福岡大学医学部に心から感謝申しあげます。



筆者のアパートのバルコニーから見た、ミネアポリスダウンタウンの風景

教室紹介

福岡大学生化学第二

本教室は、昭和五十三年九州大学薬学部より池原征夫教授が赴任され開講した。以来、細胞内の蛋白質の輸送過程に注目し研究が続けられている。当医学部内外を問わず、多くの方々に研究に参加していただいている。これまですでに濱崎直孝九州大学医学部臨床検査講座教授、織田公光新潟大学歯学部口腔生化学講座教授の二人を輩出している。

現時点でのスタッフは池原征夫主任教授、三角佳生助教授、藤原俊幸併任講師、相田美和助手、護山健悟助手、林結香里技手であり、大学院生として辻岡寛（二年、産婦人科）、また研究生として笠健児朗（第一外科）、春田竜美（大分医科大学、脳神経外科）の九人である。

教育面ではM2、M6の講義とM2、M3の学生実習を担当している。研究面では各自以下のような独創的な研究を行っている。三角助教授は、細胞内の物質輸送を解明するため細胞内小器官特にゴルジ装置に関与する蛋白の同定とその機能解析をしている。また他教室の主に遺伝子関連の仕事のサポートもしている。藤原講師は、細胞内輸送および細胞内小器官の構造維持に影響する薬剤などを用い細胞内小器官の機能や役割について主に形態学的に解明している。相田助手は、ゴルジ装置と相互作用している蛋白をすでに数種類発見し、その性質や役割について解析している。護山助手は林技手と共に、変異蛋白の細胞内輸送と分解の機構を解析している。大学院生の辻岡は、GPIアンカー型膜蛋白が血中や細胞外に遊離される際に作用するGPI-PLDという酵素の作用機構および生理学的機能を解析している。研究生の笠は、肝再生因子およびそのアクチベーターの作用機序をラットのHGFを用いて解析している。春田は、神経細胞特に前シナプスにおいて神経小胞が胞出する際に関与する各種蛋白の相互作用を検討している。また RI 施設の高見昇併任講師、病態生化学系総合研究室の緒方繁憲併任講師と共同研究を行っている。

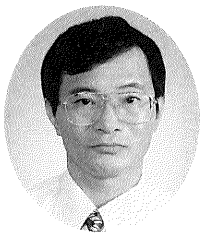
当教室では蛋白の精製など基本的なことから遺伝子工学、電顕レベルの解析まであらゆる手技を用いて各自にあった研究を行っている。研究の方針は池原教授とのディスカッションできまるが、やりたいことがあれば比較的自由にやらせてもらえる。また、週に一度のセミナーでは論文紹介と担当者の研究を全員で検討している。研究の成果は国内外の学会と質の高い国際雑誌に発表している。研究の厳しさの反面、非常に働きやすい研究室であり、これはひとえに池原教授、三角助教授のお人柄によるものである。

（文責　護山）

「親心・子心 (16)」

―研修医の心得―

耳鼻咽喉科研修医　劉　新瑜



まず自己紹介致します。私の故郷は台湾の東側にある町「花蓮」です。花蓮は太平洋に面して背後は中央山脈で、その中に大魯閣という国家公園（日本で国立公園）があります。その山々は大理石からなり、清徹の渓流と雄偉の絶壁は実に鬼斧神工にたとえもいいくらいです。

私は小さい頃から高校卒業までの十数年間、慢性副鼻腔炎に苦しんでいました。その十数年間、私は耳鼻咽喉科とは切っても切れない関係を続けていました。鼻洗浄、上顎洞穿刺洗浄、内服薬そして二回の上顎洞根治手術の後、やっと癒りました。その間、私は患者の苦痛と不安を体験し良く理解しました。その時から、私は将来必ず医学の道を選ぼうと決心しました。

しかし、この道は私にとって平坦ではなかったのです。いろいろな事情がありまして、最初、私は薬科の勉強をしており、台湾で薬剤師の免許を取りました。そして、日本に留学し、鍼灸師になりました。次に福大医学部に入学して医学を勉強し、今年やっと宿願を達成して医師になりました。

入局から今まで約六ヶ月たちまして、感想がいっぱいあります。入局したばかりで、先輩の学会発表の手伝いなどで、ほとんど毎日、夜の十一時か十二時までやっており、このようにして約一ヶ月が経過しました。学会発表が成功をおさめた時、皆の苦労が同僚の友情を深めるように感じました。暫くたってから、主治医になり、自分の患者を持ちまして、初めて責任の重さを痛感しました。

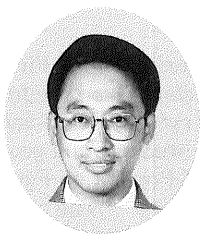
毎週、一回総回診があります。一年目の研修医が患者の病歴などを報告し、加藤教授がいろんな質問をして、患者を診察、処置をしながら患者に詳しく親切に説明します。そして、私達にいろいろ教えてくれます。私が一番感心したのは、加藤教授は全然威張ってなく、自分が患者の立場で考えてあるところで、手術は治療の終わりではなく、治療の始まりであると QOL (Quality of Life) を考えながら、処置の注意事項、患者の心理、今後の治療方針などを詳く教えてくれました。先輩達もいろいろ説明して教えてくれますので、処置室の中がなんとなく暖かく感じました。

今年の十一月、私は筑紫病院へ派遣されました。森園教授と先輩たちが私に両口蓋扁桃摘出術を教えてくれました。右側の扁桃から始まり、扁桃鎌状刀にて扁桃口蓋弓粘膜を切開時、深く切ってはいけないという事です。なぜならば、深く切ったら、翌日、創傷が痛いだけではなく創傷の治療も遅くなるからです。又、扁桃の被膜に沿って剝離子にて剝離時、必ず血管や筋層を傷つけないように丁寧に剝離して行くようにと、やりながら指導してくれました。小さい手術にもかかわらず、患者のことを考えながら丁寧にやっています。これはタイトルのいう親心だと思われます。

この半年、私は一枚の白紙の状態で入局し、教授や諸先輩のお蔭をもちまして今は少し色がついてきたように思います。毎週、三回の青丸カンファーがあり、感音難聴、耳鳴などの症例を選びまして、一年目の先生が病歴、倹査結果を読み上げ、先輩が説明してくれまして、不明瞭な点があれば、皆が本や文献を調べて討論します。必ず一番良い治療法を用いて患者を診察します。

5月に入局して早くも半年たちました。問診から始まり、倹査、処置、手術そして解剖学や病理学などの知識の活用まで、学習することは実に多大です。勿論、これはすぐできるものではないのです。先輩から教えてもらうのは早道ですけれども、事前勉強しないで予備知識がないままで、教えてもらっても効果がないと思います。時間を良く利用し、良く勉強します。将来、私の目標は「仁心仁術」（仁愛を持つ心と優れた医術）にて、子心を持って親心に恩返しすることです。

リサーチビジター



内科学第二
黄　偉

It is a pleasure for me to be given this opportunity to say a few words here.

I am Huang Wei, from Cell Biology Laboratory of China Medical University (Shenyang). Now I am working on genetics analysis of lipoproteins disorders in Dr. Sasaki's group of the second department of medicine under the presidency of Prof. Arakawa.

Last Dec. I came here. One year may not be a long time in the history, but it is important period in my carrier. After my Ph.D graduation from Russia, I felt that I need to renew my knowledge and professional techniques. It is fortune for me to be enrolled in Dr. Sasaki's group. It is here I learned most of my basic molecular genetic techniques and practised them in the research.

Scientific research system and organization as well as well-equipped Lab. in the University gave me a great impression. Each week Wednesday's discussion in the group as well as Thursdays' lecture in the department are more characteristics; Doctor's expertise both in basic and clinical medical science benefit me a lot. Besides research programme, culture activities also interested me. Thus now I have strong desire to learn more Japanese language in order to better communicate with peoples here, communication makes mutual understanding.

Finally I would like to thank Dr. Sasaki for his trust on me to have me join his research project and Dr. Matsunaga for his constant guide in the research. I want to say special words to them as well as technicians, secretariates in our department for their care in my daily life. I like those people I work with.

生化学第一
許　中偉

It is my pleasure to write the letter to introduce myself and some feelings about Fukuoka University. At first, I would like to thank Professors Matsuoka Yuji and Kuroki Masahide, the First Department of Biochemistry, School of Medicine, for their kind invitation.

As a visiting scholar, I came from the Digestive Disease Research Center and the Department of Gastroenterology, the 3rd School of Clinical Medicine, Beijing Medical University. In 1985, after graduation from the First Military Medical University, I moved to Beijing from Guangzhou city and worked in the Department of Internal Medicine, the General Hospital of Beijing Army Area. Four years later, I had the honor of being one of the first research fellows in Digestive Disease Research Center of Beijing Medical University in which I got M.S. degree and had been working until I came here.

My main project in recent years is on an experimental study of gene therapy for human gastric cancer with suicide approach—HSV-TK/GCV system. Here, under direction of Prof. Kuroki, I am engaged in immuno-gene therapy for cancers. I am very interested in this field. I hope to get more and more successes in our project and make contributions to the First Department of Biochemistry and to Fukuoka University.

Although the time I have been in Fukuoka University is just two months, most people I met impress me deeply with their warm, kind and helping way. They have made me have a feeling at home. I begin to love the people and the city. Under the better conditions of academia and work, I will do my best in study and research.

Finally, I wish to express my heartfelt gratitude again to Professors Matsuoka and Kuroki, and Arakawa, Senba, Han Hua and other people from whom I got help after I came to this university.

教室便り

学位取得

次の方々は、平成八年十一月十九日付で、福岡大学より医学博士を授与された。

林葉　康彦（法医学）
論文名「植物色素の法医鑑識学的応用　I、HPLCによる植物色素斑の同定　II、HPLCによる胃内容野菜の同定」

横山　昌典（内科学第一）
論文名 "Systemic Hemodynamics and Serum Nitrate Levels in Patients Undergoing Endoscopic Variceal Ligation"

中村　研（内科学第一）
論文名 "Apoptosis observed in peripheral T lymphocytes from patients with chronic hepatitis B"

野見山祐次（内科学第一）
論文名「多発胃癌における発見病変と見逃し病変の統計学的解析」

野元　淳子（内科学第二）
論文名 "Left Atrial Thrombus Formation in Patients with Paroxysmal Atrial Fibrillation: Study in Nonvalvular Heart Disease"

松尾　邦浩（内科学第二）
論文名 "Effects of Novel Angiotensin II Antagonist, Losartan, on Reperfusion Arrhythmias in Dogs"

幡本　明利（皮膚科学）
論文名「アトピー性皮膚炎におけるダニに対する即時型アレルギー反応の関与―ダニ特異 IgE 高値、スクラッチテスト陽性患者末梢血単核球のダニ抗原刺激による IL-4 および IL-5 産生の検討―」

渕野　由起（眼科学）
論文名 "Long-term follow-up of Visual Acuity in Eyes With Stage 5 Retinopathy of Prematurity After Closed Vitrectomy"

後藤　英一（救命救急センター）
論文名 "Potentiation of dipsogenic actions by centrally administered C-type natriuretic peptide in SHR, but not in WKY"

受賞

大島　孝一、菊池　昌弘（病理学第一）
福岡県対ガン協会ガン研究助成金
研究業績「Epstein-Barr virus の関連したリンパ増殖性疾患」

大蔡弥　悠子（病理学第一）
福岡県対ガン協会賞
研究業績「ヒト良性及び悪性軟部腫瘍の染色体分析」

Kumagai K,（内科学第二）
Uno K, Khrestian C, Waldo AL
45th Am. Coll. Cardiol. 1996, Young Investigator Award（アメリカ心臓病学会）
研究業績 "Single site radiofrequency catheter ablation of atrial fibrillation."

Kumagai K,（内科学第二）
Uno K, Khrestian C, Waldo AL
NASPE 1996, Travel Award（アメリカ心臓ペーシング学会）
研究業績 "Sustained atrial fibrillation vs nonsustained atrial fibrillation in the canine sterile pericarditis model: Role of unstable reentrant circuits."

Kumagai K,（内科学第二）
Uno K, Khrestian C, Waldo AL
23rd World Congress of Electrocardiology 1996, Young Investigator Award（世界心電学会）
研究業績 "New concept for mechanism of atrial fibrillation in the canine sterile pericarditis model."

西園　昌久（精神医学）
The 1996 Alexander Gralnick Award（アメリカ心理社会的リハビリテーション学会国際賞）
心理社会的リハビリテーションに関する研究ならびに貢献に対して贈られた。

学術交流

平成八年五月以降の海外留学者または海外から本学への留学者はつぎのとおり。

海外留学

①研修先②目的③期間

小川　皓一（解剖学第一）
①アメリカ、南カリフォルニア大学②粘膜免疫機能の基礎的研究③平成八年十月二十日～平成九年十月十九日

鈴宮　淳司（病理学第一）
①ドイツ、ベルリン自由大学病理学教室②悪性リンパ腫の病理学的、免疫学的ならびに分子生物学的研究③平成八年六月三日～九月二日

岡田　光男（内科学第一）
①England, Oxford Univ. John Radcliffe hospital
②炎症性腸疾患の病態③平成八年六月二十日～九月十九日

大城　真也（脳神経外科学）
①アメリカ、UCLA 脳神経外科②実験脳腫瘍の治療③平成八年九月～

竹吉　正文（放射線医学）
①スウェーデン、Uppsara 大学②Interventional Radiology（インターベンショナル　ラジオロジー）③平成八年七月一日～平成九年六月三十日

リサーチビジター

①所属②目的③期間④訪問先

許　中偉
①中国、北京医科大学講師②腫瘍関連抗原の分子生物学的研究と臨床応用③平成八年十月一日～平成九年九月三十日④生化学第一教室

姚　敏（Yao Min）
①中国、Suzhou Medical College ②消化管リンパ腫の日本と中国の比較研究③平成八年六月七日～十二月十五日④病理学第一教室

黄　偉（Huang Wei）
①中国医科大学（細胞生物学教室）講師②異常アポリポ蛋白の構造と機能に関する研究③平成七年十一月～平成九年十月④内科学第二教室

趙　培泉
①上海医科大学眼耳鼻喉科病院眼科助教授②増殖糖尿病網膜症と未熟児網膜症の臨床研究③平成八年十月～平成十年九月④眼科学教室

新刊紹介

福大医学会会員が、執筆した著書または単行本を以下紹介する。（①書名②発行所③発行年④価格）

▽**三好萬佐行**（解剖学第二）
猪口哲夫（久留米大学解剖学第二）①中枢神経解剖学第六版（編著）②理科社③一九九六・九・一五④三、〇〇〇円

▽**黒木政秀**（生化学第一）
①Methods in Molecular Biology, Vol.66: Epitope Mapping Protocols,（G.E. Morris, ed.）（分担）②Humana Press ③一九九六④二二、二七七円

▽**浅野　喬**（内科学第一）
①糖尿病治療、Q&Aマニュアル、馬場茂明編（共著）②医歯薬出版③一九九六・七④五、五〇〇円

▽**荒川規矩男**（内科学第二）
①運動で血圧は下がる②日経BP社③一九九六④一、五〇〇円

▽**西園昌久**（精神医学）
①重症パーソナリティ障害（監訳）②岩崎学術出版社③一九九六・一〇④四、九四四円

▽**西園昌久**（精神医学）
①精神科 MOOK 増刊2（分担執筆　境界パーソナリティ障害）②金原出版③一九九六・八・二〇④五、六六五円

▽**川谷大治**（精神医学）
①精神科 MOOK 増刊2（分担執筆　依存的薬物精神療法における精神分析）②金原出版③一九九六・八・二〇④五、六六五円

▽**Naito M., Ogata K., Shiota E., Oyama M.**（整形外科学）
①Amyloid bone cysts of the femoral neck. Impending fractures treated by curettage and bone grafting. The Year Book of NUCLEAR MEDICINE（分担）②Mosby ③一九九六④二三、五九六円

▽**大慈弥裕之**（形成外科）
①パークランド外傷ハンドブック（翻訳分担）②メディカル・サイエンス・インターナショナル③一九九六・一一・三〇④六、九〇一円

▽**有吉朝美**（泌尿器科学）
①Key Word 1997～'98 泌尿器系（分担）②先端医学社③一九九六④四、三〇〇円

▽**林　英之**（眼科学）
①眼科検査・診断のコツと落とし穴 Part 2（分担）②中山書店③一九九六・五・二〇④一〇、〇〇〇円

▽**林　英之**（眼科学）
①血管新生のメカニズムと疾患（分担）②医薬ジャーナル社③一九九六・六・一〇④五、三〇〇円

▽**大島健司**（眼科学）
①眼科手術書4　硝子体（編集）②金原出版③一九九六・七・二〇④三三、九九〇円

▽**向野利寛、林　英之、加藤　整、大里正彦**（眼科学）
①眼科手術書4　硝子体（分担）②金原出版③一九九六・七・二〇④三三、九九〇円

▽**守田則一、小川健一**ほか（健康管理学）
①Quality of Life―医療新次元の創造―（編集：萬代隆・日野原重明）10、消化器疾患における QOL―炎症性腸疾患を中心に―（分担）②メディカルレビュー社③一九九六④五、〇〇〇円

▽**Naito M., Ogata K., Shiota E., Oyama M.**（整形外科学）
①Amyloid bone cysts of the femoral neck. Impending fractures treated by curettage and bone grafting. The Year Book of NUCLEAR MEDICINE（分担）②Mosby ③一九九六④二三、五九六円

▽**大慈弥裕之**（形成外科）
①パークランド外傷ハンドブック（翻訳分担）②メディカル・サイエンス・インターナショナル③一九九六・一一・三〇④六、九〇一円

▽**有吉朝美**（泌尿器科学）
①Key Word 1997～'98 泌尿器系（分担）②先端医学社③一九九六④四、三〇〇円

▽**林　英之**（眼科学）
①眼科検査・診断のコツと落とし穴 Part 2（分担）②中山書店③一九九六・五・二〇④一〇、〇〇〇円

▽**林　英之**（眼科学）
①血管新生のメカニズムと疾患（分担）②医薬ジャーナル社③一九九六・六・一〇④五、三〇〇円

▽**大島健司**（眼科学）
①眼科手術書4　硝子体（編集）②金原出版③一九九六・七・二〇④三三、九九〇円

▽**向野利寛、林　英之、加藤　整、大里正彦**（眼科学）
①眼科手術書4　硝子体（分担）②金原出版③一九九六・七・二〇④三三、九九〇円

▽**守田則一、小川健一**ほか（健康管理学）
①Quality of Life―医療新次元の創造―（編集：萬代隆・日野原重明）10、消化器疾患における QOL―炎症性腸疾患を中心に―（分担）②メディカルレビュー社③一九九六④五、〇〇〇円

リサーチビジター

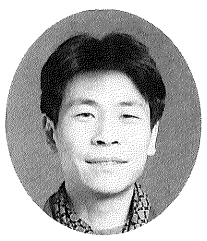
病理学第一
姚　敏

My name is Yao Min. I come from Suzhou Medical college, Suzhou, China. I have been working as a teacher and doctor of pathology in that school since I graduated. Suzhou, with a history of more than 2500 years, is called a garden city. When I came here five months ago, I found that Fukuoka is a big garden. The green mountain, the blue sea and the colorful flowers always make the atmosphere smell fresh.

I am greatly indebted to Professor Kikuchi, I could come here, the first department of pathology, Fukuoka University School of Medicine. Because this is my first time to be abroad, I felt nervous at first. But the cordial help around made me relaxed at last.

Here, the advanced level of research and diagnosis excited me. The medical library gives the best service of information. I want to learn as much as possible. For half a year, I have learnt a lot from Professor Kikuchi, Professor Iwasaki, associate Professor Ohshima, doctor Suzumiya and other doctors. My histologic diagnostic capacity in bone marrow, lymph node and other tissues have been improved. Under the guidance of Professor Kikuchi and associate Professor Ohshima, I also completed a study on Epstein-Barr virus infection and its correlation with interleukin-10 and cytotoxic T cells in nasopharyngeal carcinoma.

Again, I want to express my heartfelt gratitude to Professors, doctors and other colleagues in the first department of pathology for every thing they have done for me. I'll never forget their kindness and friendship. Before long, I'll return to my motherland, my hometown. Although six months is very short, I have had a deep impression on this land and its people. I'll never forget the substantial time during my stay in Fukuoka.



解剖学第一
朱　錦

Is is my pleasure to get the opportunity to write this letter to introduce myself. I would like to thank professor Miyauchi for this invitation.

When I came to Fukuoka in the spring of this year, Sakura was in full bloom in the streets, parks and mountains. It is a beautiful city in my impression. Now, the winter has come. The first snow has fallen. Kaede has become red, beautiful colour. Unconsciously, as time goes on, I have been here about eight months. Even though so short, I have learnt a lot of things from my supervisors, professor Miyauchi, Dr. Ogawa and the other doctors in the First Department of Anatomy in Medical School of Fukuoka University. I would like to extend my heartfelt thanks for their friendliness and hospitality.

After graduation from the West China University of Medical Sciences in 1983, I worked in the First Hospital of Chengdu as a resident doctor about one year. Then, I have worked in Sichuan Institute for Human Reproductive Medicine as a researcher and lecturer studying in the fields of cytochemistry and cytobiology, I have also taken courses of histology and embryology for undergraduate students and professionals who come from whole country. The Institute was set up by the supporting of Population Fund of the United Nations. It helps China to solve problems in medical technique of birth control. The chief cause is to train the professionals who have worked in clinical as a doctor at least five years to master the new technique and new basic theory, and progresses research in this field. The project in which I engaged is the human sperm undergoing the process of capacitation and acrosome reaction. It is important for fertilization. It is not only relating to birth control but also to sterile treatment. As estimating, about 10% of couples in total suffer from sterility in China. We try to understand the changes of sperm undergoing through capacitation and acrosome reaction by cytochemical and morphological methods, and then try to find some chemical materials which can effect of the process on the process for contraception and artifical fertilization.

I came here to study spermiogenesis by scanning electron microscopy. Under the direction of my supervisor, I am enlightened much on studying and practicing in experiment. We used to take SEM to observe the surface structure of cells and organs. Here, I learnt how to use SEM to reveal the fine membranous and fibrous structure inside of cells. The condition of research is very impressive in this University. It is very excellent and convenient. I am also glad to have the chance to view and learn the practice of anatomy in Medical School of Fukuoka University. From that I got a deep understanding of medical education in Japan.

I also owe a great deal to my other tutors as well. Dr. Yamashita, Dr. Tachibana, Dr. Tsujita and Mr. Takehara give me great help in profession and taking care of my living. I would like to thank Ms. Nagamori and Ms. Ogata for their kindness.

I lack words with which to express my gratitude to every professor and colleague in Medical School of Fukuoka University. I shall remember the experience which I obtained here.